

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	カントの『遺稿』における自然と自己認識 : 第X 束における「現象の現象」
Author(s)	嶋崎, 太一
Citation	ぶらくしす , 21 : 15 - 25
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/48971
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048971
Right	
Relation	



カントの『遺稿』における自然と自己認識 —第 X 束における「現象の現象」—

Nature and Self-Knowledge in Kant's *Opus postumum* -”appearance of appearance” in Xth Convolt-

嶋 崎 太 一 (広島工業大学高等学校)
Taichi Shimazaki

はじめに

本稿が注目するのは、カントの最晩年の遺稿『オプス・ポストウムム』(以下、『遺稿』)である。『遺稿』は、「自然科学の形而上学的原理から物理学への移行[Übergang]」を主題とする「主要著作[chef d'oeuvre]」¹として準備されたものの、結局完成を見ることがなかった²。

本稿は、『遺稿』のうち 1799 年 8 月から 1800 年 4 月にかけて執筆された第 X 束、第 XI 束のうち、第 X 束に集中的に登場する概念「現象の現象[Erscheinung der Erscheinung (usw.)]」に着目する。第 X 束、第 XI 束が晩年のカントの自然科学思想において特筆すべきであるのは、ホールが指摘するように³『遺稿』において物理学は、『自然科学の形而上学的原理』(以下、『原理』)における「形而上学的物体論」(IV 473)としてではなく「経験そのものの形而上学的原理」とでも呼ぶべき拡張された定義が与えられているからである。例えば物理学は、主観的には、「経験の可能性の一つの原理の下への経験的表象の多様なものの包摂の概念に従った教義体系」(XXII 500)であるとされ、客観的には「経験の可能性の原理に従って全体を形成する限りにおいて、経験において与えられる経験の対象の集積である」(ibid.)とされる。こうした定義からは、自然に対して受動的でありつつも能動的でもある主観の在り方が浮かび上がることになる。すなわち、経験を通して主観に対して対象が与えられるという受動的な在り方と、経験的諸表象を「包摂」するという能動的な在り方協働することによってはじめて物理学は可能となるのである。

物理学において経験の主観としての人間は、対象としての自然に対していかなる関係をもつことになるのだろうか。

1 批判期の自然科学論における自然と人間の関係

1. 1 投げ入れ

カントは『純粋理性批判』序文において、ガリレイやトリチェリ、シュタールの実験に言及しつつ、次のように自然科学における人間の態度を表明している。

理性は、一方の手には、互いに一致する諸現象がそれに従ってのみ法則とみなされうる自らの諸原理をたずさえ、また他方の手には、理性がそれらの諸原理に従って考案した実験[Experiment]をたずさえ、自然に向かっていかなければならないが、それは (...) 教師の欲することを何でも言わせられる生徒の資格においてではなく、自らが提出する問いに答えるよう証人たちに強要する正式の裁判官の資格においてである。かくして物理学すらもその思考法のこうした有益な革命をもつばら次のような着想に負わなければならない。それは、理性自身が自然のうちへと投げ入れる[hineinlegen]ものに依じて、理性が自然から学ばなければならない (...) という着想である。(B XIII f.)

ここにおいて人間は、「投げ入れ」を通して「自然に自らの問いに答えるよう強制する」(B XIII) 教師、裁判官として、対象としての自然へと向き合う存在としてとらえられる。この際、理性の投げ入れとは、一つの「実験」である。

1785年の講義録『ダンツィヒ物理学講義』においてカントは、我々の人為的な意図を介さない「通常の経験」から「人為的経験[*experientia artificialis*]」を区別し、さらにこの人為的経験を、注意を向けるという行為によって成立する「観察」と、「物体をひとりですうはならないであろう何らかの状況に置く[*setzen*]」(XXIX 102) という行為による「実験」とに区分している。以上のことから、実験を介して自然を特定の状況に「置く」という試みによって自然を探求するということこそ、「理性自身がその企図にしたがって産出したものだけを洞察する」(B XIII) という「投げ入れ」の方法であると解することができる⁴。

このように、自然科学において我々は実験的な投げ入れを通して自然に対して向かっていく。しかし言うまでもなく、これと同時に我々は、自然から触発されるという受容的な存在でもなければならない。

1. 2 触発

周知のように触発は『純粹理性批判』などで展開される重要な概念であるが、『原理』では、序文のただ一箇所、触発が言及されている。

外的感官の対象であるべきもの〔物質〕の根本規定は運動でなければならなかった。というのも、運動によってのみこの感官が触発されうるからである。(IV 476)

この記述は、かつてアディケスが注目したように⁵、現象による触発が語られたものである。すなわち、「運動」という概念を物自体の属性とみなすことはできず、これを批判期の触発概念のように物自体からの触発と同一視することは困難である⁶。物理学においては、我々の眼前にある自然によって確かに我々は触発されていなければならない。現象による触発は、幾つか断片的に語られている箇所があるものの⁷、批判哲学において体系

的に語られることはなかった。確かに『原理』においても触発が語られるのはこの一節にとどまり、示唆的な仕方では物理学の可能性のための触発の在り方に言及されることはなかった。

このように、主観は、悟性をもつ存在としては自然に対して実験的投げ入れを行うと同時に、感性的存在者として、自然によって感官を触発されるのである。とはいえ、このいずれも、批判期において体系化されているとは言い難い。そして、この二つの課題は、次節以降に見るように、『遺稿』へと引き継がれることになる。

2 『遺稿』における「現象の現象」概念の整理

「現象の現象」は、『純粹理性批判』の認識論の用語法からすれば、一見して奇妙な外観をもつ概念であり、「カントによって展開された最も困難な概念」⁸とも評される。第 X 束（及び第 XI 束）が課題としているのは、「1 物理学とは何か？ 2 自然科学の形而上学的原理から物理学への移行とは何か？ 3 そうした移行はいかにして可能か」

(XXII 456f. passim) という問題である。「物理学は現象の現象を扱う」(XXII 319) という叙述から明らかなように、「現象の現象」は第 X 束、第 XI 束全体の主題に正面から向き合う概念であったことは確かである。

まず、第 X 束において「現象の現象」の表現に注目するとき、この表現だけにとどまらず、実に様々な表現が与えられているという事実が気が付く。レーマンは「現象の現象」を指す一連の表現を「現象段階[Erscheinungsstufung]」⁹として包括している。まず、我が国で「現象の現象」と訳されているものでも、Erscheinung der Erscheinung (XXII 329)、Erscheinung der Erscheinungen (XXII 322, 326, 367)、Erscheinung von der Erscheinung (XXII 325 usw.)、Erscheinung einer Erscheinung (XXII 332 usw.)、Erscheinungen von Erscheinungen (XXII 319) など、原語として一貫性を欠く状況にある。また、「現象の現象」以外の表現方法としては、いわゆる通常の「現象」に対して第二層[zweiter Rang]の現象とするもの (XXII 367)、また第二次[zweite Ordnung]の現象とするもの (XXII 339)、さらには直接的現象である「現象」に対して間接的現象と呼ぶもの (XXII 340) などがある。

次に、「現象の現象」の性格について概観しておこう。カントは次のように語っている。

空間（と時間）における諸物の現象には二通りある。

- 1 我々自身がそれを空間のうちに（ア・プリオリに）投げ入れる対象の現象。これは形而上学的現象である。
- 2 我々自身に経験的に（ア・ポステリオリに）与えられる現象。これは物理的現象である。

後者は直接的現象であり、前者は間接的現象、すなわち現象の現象である。

間接的現象の対象は事象それ自身[*die Sache selbst*]である。—我々がそれを投げ入れる[hineinlegen]限りにおいて直観から取り出してくる現象、すなわち、我々の固有の

認識の産物である限りにおける現象である。

(XXII 340f.) ①

このように、「現象の現象」がしばしば、「事象それ自身」あるいは「対象それ自身」(XXII 325) と呼ばれている点は注目に値する。

しかし、引用①に見られる形而上学的現象と物理的現象という区分には、実は揺らぎがみられる¹⁰。第 X 束の叙述の中から「現象の現象」の説明を 18 種類¹¹に分類したマチウは、先の引用①を言葉通りに受け取り、「現象の現象」を形而上学的現象、「現象」を物理的現象とみなしている¹²。しかし、これとは反対の記述も散見される。

感官の対象は形而上学的にみれば現象であるが、しかし物理学にとっては事象それ自体[*die Sache an sich selbst*]である。それは、感官を触発する対象¹³であるか、あるいは主観が自らを触発する (ア・プリオリに表象する) 仕方であるかである。(XXII 320) ②

ここでは、引用①とは異なり、「現象」を形而上学的とし、「現象の現象」である事象それ自身は物理学にとっての対象であると説明される。同様の例として、「1 感官が触発されるとおりの、形而上学的意味における現象。2 主観自身が形式に従って運動力によって感官を触発するとおりの、物理的意味における現象」(XXII 325) という記述もある。さらにカントは、次のように言う。

形而上学的にみれば単に現象に数えられなければならないものが、物理学的な観点では事象自体[*Sache an sich selbst*] (現象の現象) であり、ア・プリオリな結合の形式的なものとして認識される。物理学に属する現象の概念 (それはなおも仮象からは区別されなければならない) は、運動力がそれに基づくところの感官の表象の与件 (Data) である。(XXII 329) ③

引用②及び③からは、「現象」と「現象の現象」は異なる二つの諸事象ではなく、同じ事象の二つの観点から考察したときの概念である¹⁴ということがはっきりと示唆されているが、形而上学的観点において「現象」であるものが物理学的観点においては「現象の現象」と呼ばれるという論理がここでは見出される。冒頭で述べたように「物理学は現象の現象を扱う」(XXII 319) 学であることから、「現象の現象」こそ物理的現象にほかならず、それとの対比において「現象」は形而上学的現象と呼ばれるべきであろう。

これを踏まえた上で、さらに、「現象の現象」の性格として引用①、②、③から判明することは、「現象の現象」が物理学的にはア・プリオリなものとしてみなされなければならない、という点である。「現象の現象」がア・プリオリであるのは、主観のア・プリオリな投げ入れにより構成されるということから理解することができるだろう。

我々が、経験の実質をなすところの感官の表象から取り出してくるのは、運動力における経験的なものの合成[Zusammensetzung]の形式的原理に従って我々自身が投げ入れ[hineinlegen]たものに他ならない。現象はここでは事象自体とみなされる。(XXII 319)・・・④

このように、投げ入れとはア・プリオリな形式に従って実質としての現象を「取り出す」ことによって物理学的な対象（物理学における事象自体）を再構成するという手続きに他ならない。

以上の考察から、「現象の現象」は、物理学が扱う対象として、物理学的観点における事象自体と呼ばれうる概念であり、主観の「投げ入れ」というア・プリオリな作用によるものであると言うことができる。

3 物理学における投げ入れ

3.1 「投げ入れ」とは何か

『遺稿』において「投げ入れ」とは何を意味するのだろうか。『遺稿』第 X 束では次のように語られている。

物理学は体系なのだが、我々はその体系そのものを、[知覚の]集積の多様なものを我々がア・プリオリな原理に従って投げ入れ、それを合成する限りにおいて以外に知ることはできない。(XXII 299)

ここで「投げ入れ」は、『純粹理性批判』序文と同様、我々が実験において行うものとして考えられている。物理学は「観察と実験」によって行われる「経験的自然研究の体系」であるが、この「観察と実験」はともに「我々が試みに[versuchsweise]投げ入れたものを感官の表象から取り出すという方法」(XXII 318)であると言われているのである。

『遺稿』において物理学とは、「物質の運動力の総体 (*complexus*) の経験的学である」(XXII 298) というように経験的自然学を意味しているが、単に経験的知識の集合体ではなく、我々の「投げ入れ」という作用によって成立する学である。物理学は「対象がそれ自体で何であるかではなく、我々がいかに触発されているかを叙述する」(XXII 318) 学であるが、触発による経験的表象（一次的現象）を我々が体系として構成したところに物理学が成立するのである。カントはこの作用を「投げ入れ」呼ぶのだ。「経験からでも、経験によってでもなく[nicht aus und von der Erfahrung]、経験の可能性のために[für]、運動力の統一という概念によって、観察と実験を通して物理学が構成される」

(XXII 325) と言われていることから明らかなように、物理学は経験を構成する我々の悟性に基づく。「我々が自らの経験的表象に対して投げ入れた (...) ものを、すなわち悟性によって、感官の表象から取り出す」(XXII 343) というように、投げ入れとは悟性の働きなのである。

3. 2 「考えられたものとしての自然」

先の引用④によれば、このように「投げ入れ」られた諸現象が事象自体として物理学の対象となるのだが、これは主観のア・プリオリな自発性に由来する。ここでカントは、与えられたものとしての対象と考えられたものとしての対象という二つの視点が一つの対象について両立しようという論理を展開する。カントによれば「一つの経験のみが存在するのだから、諸知覚の総合的統一は、ア・プリオリに知覚の無制約的全体において考えられる (cogitabile) ものであると同時に与えられる (dabile) ものである」(XXII 377)。主観に与えられた現象は、同時に主観の「投げ入れ」作用において考えられた対象としてもとらえられなければならない。

物理学は自然の運動力を経験の体系において結合する原理の学である。そこには、
1) 経験的諸表象という**実質的なもの** (dabile)、2) 体系における諸表象の多様なものの調和 (Zusammenstellung) という**形式的なもの** (cogitabile) が属する。この形式的なものは、統一としての経験の可能性のために諸表象の結合の法則を含み、ア・プリオリな結合の理念として根底に置かれなければならない (*forma dat esse rei*)。
(XXII 313)

考えられたものとしての自然が、形式的なものとして、与えられたものとしての自然に論理的には先行する。カントはこのことを、*forma dat esse rei* という命題に象徴させる。スコラ哲学に由来する¹⁵この命題は、『遺稿』において特に 1799 年以降の草稿に頻出し、『遺稿』全体の「モットー」¹⁶とも言われる。カントによれば「物理学を基礎づけるために、[知覚の] 結合の形式的なものがア・プリオリに先行する (*forma dat esse rei*)。すなわち、我々は、我々が物理学へと投げ入れたもののみを取ってくることができる」(XXII 306)。

投げ入れを通して構成された「現象の現象」は、主観に取り込まれた意識内容としての自然を意味する。マチウが、おそらくはポパーを念頭に置きつつ、第二次的現象(すなわち「現象の現象」)を「世界 2」と呼ぶ¹⁷のはそのためである。「主観が外的に感覚したものを主観のうちへとア・プリオリに投げ入れる」(XXII 321)と言われているように、主観は投げ入れを通して「与えられたものとしての自然」を「考えられたものとしての自然」へと転化し、意識に与えられたものとして再構成すると言えよう。

このように、物理学において事象自体として取り扱われる「現象の現象」は、主観の悟性(それは形式を与える)による実験的な投げ入れによって構成された対象として理解することができるだろう。

3. 3 二つの解釈

最も早く「現象の現象」に注目し、一つの整合的解釈の道筋を示した理論が、アディケスの二重触発論である。アディケスの二重触発論においては、物自体が自我自体を触発

し、「力の複合体」としての現象が得られる。そして現象が経験的自我を触発して「現象の現象」が構成されるという。この「現象の現象」は、「色のついた、音のする、硬い、柔らかい」¹⁸二次性質を備えた具体的対象である。この二重触発論は様々な批判を被ってきたが¹⁹、主観の投げ入れにより現象の現象が構成されるとする上述の議論とも齟齬をきたす。カントは「投げ入れ」を悟性による自発的な作用として考えており、引用①、④にあるように、その帰結として得られた対象が「現象の現象」である。したがって「現象の現象」を構成するのは経験的自我ではなく悟性にほかならず、経験的触発のレベルで考えることはできない。

同様にアディクセスらの二重触発論から「現象の現象」を解釈することに批判的姿勢を示したものとしてバイザーの研究がある。バイザーは、悟性と感性という批判哲学の二元論が『遺稿』においても踏襲されているとして、悟性によって創造された対象として「現象の現象」を、感性に与えられた対象として「(一次的)現象」を当てている²⁰。バイザーは「第X束、第XI束²¹における現象の二段階の区別は、完全に経験と知覚の間の区別に対応している」と述べた上で「(一次的)現象」が知覚の多様なものであり、「現象の現象」が「知覚の体系」としての経験であるとしている²²。バイザーによれば「(一次的)現象」が経験的であるのに対して「現象の現象」は超越論的である。バイザーは「投げ入れ」にはさほど注目していないが、上述の議論を踏まえるならば、「投げ入れ」を行う悟性の在り方が超越論的なものであると理解する限りでバイザーの解釈は正当性を有すると言えよう。ただし、バイザーの説明では「現象の現象」と「投げ入れ」そして「自己触発」との関係は明確ではない。

しかし、引用①～④から分かるように、「現象の現象」の説明において、投げ入れとらんで「自己触発」が語られている。そのため、投げ入れによる「現象の現象」の構成と自己触発の関係が問われなければならないだろう。

4 「投げ入れ」と自己触発

さて、『遺稿』における「投げ入れ」の概念に注目した研究者としてホッペがいる。ホッペはこの投げ入れを自己触発と同一視する。ホッペは、「自己触発は、経験の形式を経験のうちへと実際に投げ入れることに他ならない (...)」²³と主張する。そのうえでホッペは、この投げ入れを「現象の現象」と関連付ける。ホッペによれば自己触発とは対象を「現象の現象」として作り出す働きである。実験を通して与えられる経験の対象は我々の知覚の集積に過ぎない。物理学はこれを理解しなければならないが、知覚の統一の主観の結合作用の帰結なのである²⁴。ホッペはこの結合作用を「投げ入れ」としてとらえ、この「現象の現象」とはこの投げ入れによって構成された対象であると解する。ホッペの解釈は、「現象の現象」を自己触発と関係づけるカントの説明と整合性を有する点を強みとするが、以下のような問題に対して応答することが困難である。第一には、カント自身が投げ入れを自己触発の働きと直接的に指示している記述を『遺稿』中に見出すことはできないという点である²⁵。第二に、自己触発を「投げ入れ」の働きとするならば、自己触発を外発的触発から切り離さなければならないという問題である。『遺稿』において外発的

触発は、第1節で検討した『原理』の運動による触発と同様、「主観が感官の対象によって触発される」(XXII 458) というように現象レベルにおいて語られており、超越論的なものではないからである。他方、既に述べたように「投げ入れ」が悟性の働きである以上、「投げ入れ」と自己触発が同一視されるならば、自己触発は悟性による超越論的なものでなければならない。しかし「触発され、そして自己自身を触発する主観」(XXII 390)、「自己自身を触発しつつ外的に触発される」(XXII 401) というように、カントは自己触発を外的触発と並列的、同時的なものとして語っている²⁶ことを踏まえるならば、現象レベルでの外的触発に対して自己触発に超越論的な機能を期待することは困難である。このように、ホッペの解釈にも問題が残ると言わざるを得ない²⁷。

それでは、「現象の現象」概念と自己触発はどのような関係をもつのだろうか。

主観的に間接的な現象。そこでは主観は自己自身にとって経験的認識の対象である。そして、[主観は] 同時に自己自身を経験の対象とする。[主観が] 自己自身を触発する限りにおいて主観は現象の現象[*das phaenomenon eines Phänomens*]である。(XXII 373)

このように、自己触発は自己客体化にかかわる概念である。自己触発を通して主観は自らを「現象の現象」、すなわち「考えられたものとしての自然」のうちにある一つの対象として置かれることになるのである。「現象の現象」は「主観が自己自身を客体となす仕方」(XXII 326) であるとも言われている。さらにカントは、「自己自身を触発する主観の現象」(XXII 367) が間接的現象であるとしている。主観は自己を触発することによって、「現象の現象」世界の中に、やはり「現象の現象」として現象するのである。自己触発はまさにこの自己客体化を実現する作用であるが、カントはこれを、外的触発同様、現象レベルにおいてなされるものとみなしていた。ここで主観は身体的な存在者とみなされなければならない。ここで注目すべきことは、「物質の運動力は、主観、すなわち人間、そしてその器官を触発する。なぜなら人間は身体的存在者だからである」(XXII 298) と言われているように、外的な触発において主観は身体をもった存在者であることが前提されているという点である。そしてこのことは、外的触発と並列的に語られる自己触発についても同様である。

カントは『純粋理性批判』(特に第二版)においても自己触発を通じた自己認識について語っている。

我々が内的感官を通して自己自身を触発するのは、我々が内的に自己自身によって触発されるとおりにのみ直観するということを認めざるをえず、換言すれば内的直観に関して言えば、我々自身の主観を現象としてのみ認識するのである (...). (B 156)

『純粋理性批判』において自己触発は、内的感官の規定、換言すれば主観の表象経験の時間的先後関係の規定であった²⁸。しかし『遺稿』において自己触発は、時間的な規定

のみならず、自らを空間的に位置づけるものである。またこれは、超越論的なレベルで働くものではなく、あくまで所与世界において、経験的対象からの触発と並んで行われるものであると言わなければならない。

カントは主観的経験を「器官の触発による、経験的意識の全体における現象の現象」(XXII 350) と言い換えている。「現象の現象」は経験的意識のうちにあるものであり、「考えられたものとしての自然」としての「現象の現象」の世界において人間は身体的存在者として客体化されるのである。

おわりに

老カントの遺した『遺稿』第 X 束にみられる「現象の現象」という耳慣れない概念は、「与えられたものとしての自然」に対して我々が「投げ入れ」と呼ばれる悟性の実験を通して構成した「考えられたものとしての自然」であった。この「投げ入れ」は、悟性による実験を通して行われる、所与世界に対して意識世界を構築する作用に他ならない。そして主観は自らを意識世界の中に客体として存在するものとして自己自身を触発するのである。その意味で『遺稿』において自己触発は自らの身体性という実質を伴った触発として想定されなければならない。ところでカントは、「自己自身を物理的〔身体的〕[physisch]、そしてまた有機的存在者として触発する」(XXII 376)、「経験的直観によって触発される主観（現象における対象）は、概念に従って自己自身を触発する限りで、有機的身体である」(XXII 388) というように、客体としての自己の有機体論にも言及しているが、この点については、別稿に委ねざるをえない。

ニュートンによって確立された近代物理学における実験的方法は、自然を対象化する。「観察と実験」を基盤とする物理学の確立において、いかにして我々は自然とともに存在しうるのか。老カントの物理学論は、この問いに対して今なお我々に一つの手がかりを提供していると言ってよい。

注

- ¹ J. G. Hasse, *Letzte Aeusserungen Kant's*, in: *Der alte Kant*, hrsg. von A. Buchenau und G. Lehmann, 1925, S. 23f. これはカントと食卓を共にしていた神学者・東洋学者 J. G. ハッセの証言であるが、バジールによればカントが直接この言葉を用いていた形跡はない (G. P. Basile, *Kants >>Opus postumum<< und seine Rezeption*, Berlin/Boston, 2013, S. 451).
- ² E. アディクスらによって草稿群の執筆年代の推定が行われ (E. Adickes, *Kants Opus postumum*, Berlin, 1920.)、その後フェルスターらによる再検討を経て (E. Förster, Introduction, in: I. Kant, *Opus postumum*, tr. by E. Förster & M. Rosen, Cambridge, 1993, p. xxviii.) 『遺稿』の成立事情が明らかになりつつあるが、それによれば、遅くとも 1790 年代半ばには「物理学への移行」への取り組みが始まり (E. Förster, Introduction, p. xxviii. Cf. E. Förster, *Kant's Final Synthesis*, London, 2000, p. 3.) カントは死の直前までこの草稿の執筆を続けていた。
- ³ B. W. Hall, *The Post Critical Kant*, New York, 2017, p. 131.

- 4 カントの「実験」、「投げ入れ」の概念について再検討した国内の研究として次のものを挙げるができる。渡邊浩一『『純粹理性批判』の方法と原理 概念史によるカント解釈』、京都大学出版会、2012年、75頁以下。
- 5 E. Adickes, *Kants Lehre von der doppelten Affektion unseres Ich als Schlüssel seiner Erkenntnistheorie*, Tübingen, 1929, S. 9.
- 6 K. Pollok, *Kants >>Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft<< Ein kritischer Kommentar*, Hamburg, 2001, S. 162.
- 7 例えば、『純粹理性批判』における「光によって或る仕方で触発される視覚の感官」(A 28/B 44)などを挙げるができる。
- 8 E. Adickes, *Kants Opus postumum*, S. 294, 303.
- 9 G. Lehmann, *Erscheinungsstufung und Realitätsproblem in Kants Opus Postumum*, in: *Beiträge zur Geschichte und Interpretation der Philosophie Kants*, Berlin, 1969, S. 374.
- 10 これを「現象」／「現象の現象」の区分として採用しない解釈もある。例えばアディケスは、形而上学的にみた「現象」と「現象の現象」、物理学的にみた「現象」と「現象の現象」という区分がみられると説明している (E. Adickes, *Kants Opus postumum*, S. 305, E. Adickes, *Kants Lehre von der doppelten Affektion*, S. 24)。これによれば、確かに「形而上学的」「物理学的」の用語の混乱をカントの齟齬に帰することなく説明ができるが、カントは、どのような用語を用いるにせよ現象の二区分のみを語っており、ここで計4つの「現象」を想定することには説得力がないように思われる。
- 11 マチウによれば『遺稿』中に「現象の現象」についての説明は、(1) 間接的現象、(2) 形而上学的現象、(3) 物理学の用をなすもの、(4) 主観的表象様式、(5) 客観的現象に先行する、(6) 事象それ自身、(7) 我々によって働きかけられた総合、(8) 空間のうちに投げ入れたもの、(9) それによって主観的なものが客観的となるもの、(10) 物理学への第一の移行、(11) 自己触発の成果など18種類に分類される (V. Mathieu, *ibid.*, S. 144f.)
- 12 マチウは、第VII束の「直観は純粹であり、すなわち、いかなる知覚も交じりこんでいないがゆえに、それによって主観が自己自身を客体となす作用は形而上学的である」(XXII 79)という記述を援用している (V. Mathieu, *ibid.*, S. 145.)。しかし、第VII束の自己定立論において「形而上学的」と対置させられているのは「物理学的」ではなく「論理的」であり (vgl. XXII 77 *passim*)、第X束における形而上学的現象と物理学的現象との対比を検討するための根拠とはなりえない。
- 13 ここで「現象」が「感官を触発する対象」であるとされている点は、第四節で再び重要となる。
- 14 G. P. Basile, *ibid.*, S. 416. なお、批判期の著作における物自体と現象の区別が、こうした観点の違いであるとする解釈は、プラウスなどによって主張されている (G. Prauß, *Kant und das Problem der Dinge an sich*, Bonn, 1974.)。
- 15 レーマンはアカデミー版XXIX巻注において、グラウブナーの研究 (H. Graubner, *Form und Wesen: ein Beitrag zur Deutung des Formbegriffs in Kants Kritik der reinen Vernunft*, Bonn, 1972)を援用しつつ、*forma dat esse rei* はペトルス・ヒスパヌスを初出とし、カントはこれを直接的にはヴォルフから引き継いだという見解を示している (XXIX 1113(Anm.))。
- 16 V. Mathieu, *ibid.*, S. 129.
- 17 V. Mathieu, *ibid.*, S. 154. なお、マチウは同著においてはポパーの名前を挙げてはいない。ポパーの名前を挙げつつマチウの解釈を概説しているのは、バジールである (G. P. Basile, *ibid.*, S. 164.)。
- 18 E. Adickes, *Kants Lehre von der doppelten Affektion*, S. 36f.
- 19 一見して奇妙な概念である「経験的触発」の正当性を示すことにその成立がかかっている

るが、経験的触発は、我々の表象の産物である現象がいかにして我々の感官を触発し
うのかという根本的な問題に対して応答できない。このように、二重触発論は物自
体からの触発を想定した場合に生じる問題点と現象からの触発の問題点とをともに内
包した「二重トラブル」に過ぎないという批判も寄せられることになる (J. v. Cleve,
Problems from Kant, New York, 1999, p. 163.)。

²⁰ F. Beiser, *German Idealism*, London, 2002, p. 208.

²¹ バイザーはこのように記すが、第 XI 束には「現象の現象」の術語は登場しない。第
XI 束には「現象段階」の思想は見いだされないと行ってよいと思われる。なお、第 XI
束には「経験の経験[Erfahrung von der Erfahrung]という語がたった一箇所に見出さ
れる。これが現象段階の思想の痕跡であることはほぼ疑いえないが、知覚を経験から
区別する限りにおいて「経験の経験」という語は意味をなさないように思われる。

²² F. Beiser, *ibid.*, p. 204.

²³ H. Hoppe, *ibid.*, S. 125.

²⁴ H. Hoppe, *ibid.*, S. 119.

²⁵ 「我々が経験的直観から取り入れてくるのは我々が物理学のために投げ入れたものに
過ぎない。主観は現象としての総合において自己自身を触発する」(XXII 405) という
記述をホッペは援用しているが、必ずしも自己触発によって「投げ入れ」が行われて
いるという意味に解釈する必然性はなく、ホッペはかなり踏み込んだ読解をすること
によって「自己触発=投げ入れ」テーゼを正当化することを試みている。

²⁶ 外的触発と自己触発の関係については、(1)並列的關係、(2)外的触発の結果としての自
己触発、(3)反省作用としての自己触発という三通りの解釈があるとされるが (A. M.
Serra, *Affektion, Selbstaffektion, Heteroaffektion: Modulationen eines quasi-*
Begriffs bei Kant und Husserl, in: *Kant and the Metaphors of Reason*, ed. by P. K.
Leite et. al., Hildesheim, 2015, p. 517ff.)、少なくとも『遺稿』においては、(1) の
関係をカントは想定していると思われる。これについては稿を改めて検討したい。

²⁷ ホッペと同じような解釈の方向を採用しているのがヒュブナーである。ヒュブナーも
悟性の投げ入れに注目し、「悟性によって統一された多様なものとしての対象が間接的
現象となる」と述べている (K. Hübner, *Leib und Erfahrung in Kants Opus*
postumum, in: *Kant. Zur Deutung seiner Theorie von Erkennen und Handeln*,
hrsg. von G. Prauß, Köln, 1973, S. 197.)。ヒュブナーも自己触発を全く形式的なも
のと解釈しているが、本発表の解釈によれば『遺稿』において自己触発は実質を伴っ
たものである。

²⁸ ケラーによれば『純粹理性批判』における自己触発とは、「連続的意識の諸々の今
[nows]を結び付ける過程」である (P. Keller, *Kant and the Demands of Self-*
Consciousness, Cambridge, 1998, p. 101.)。